

- 1 -

ゲーテは日本人だったのか？

新東京ゲーテ記念館のオープニングに寄せて

1932年日本ゲーテ協会がゲーテ没後100年の命日を記念して刊行した論文集に、トーマス・マンの余り知られてはいないが、それだけ一層重要な寄稿があるが、その中に次のような驚くべき言葉がある。

「神話を形成する個性の奇蹟としてのゲーテの姿が、いつの日かナザレのイエスの姿のごとくに尊敬されないと誰が言えよう。愛と未来の充溢に於いてゲーテはイエスに似ていなくはなかった。しかも存命中に既にゲーテは神のような人と呼ばれていたのである。」

神話を形成する個性の奇蹟としてのゲーテが、遠い日本に於いて極めて特異な一人の使徒を既に見出していたことをトーマス・マンは無論知るべくもなかった。茨城県に住む一人の日本人高等学校生徒の姿をとって、ゲーテには日本における一人の従者が生まれていたのだった。かなり長い間病気をしていた折に、18才の粉川忠は病床でゲーテのファウスト第一部の翻訳を読み次のような記念すべき結論を得た。

「完全には理解できなかったが、最後迄読んだ時、私は消しがたい印象を受け取っていた。」

仔細に吟味するならば、ここで起こっていたのは、我々の祖先ならば「覚醒」と呼んだであろう稀有なケースなのである。いずれにせよ、受け取った印象は、極めて「消しがたい」ものであったので、粉川はある日、自己の生涯をこのワイマール市民への奉仕に捧げ、これを記念するために、世界でも例をみないような図書館を建てようと決意したのであった。

「夜の旅人」という題で1983年日本で出版された粉川の伝記は、まさにゲーテの教養小説「詩と真実」の題辞を実証する具体例として読める。題辞に曰く、「若き日の願いは、

年老いて心ゆくまで充される。」粉川においてもまた、始めに願いがあり、それが後年充全なる実現をみたのである。

1932年に彼の蔵書は、ゲーテの著書並びにゲーテ文献を合わせて35冊であった。粉川はこの時点で成功した実業家として東京に住んでおり、1934年には結婚した。1937年には召集されたが病気のため兵役解除となった。粉川曰く、「私の命がまるで神からの授かりもののような気がした。私はそれをゲーテに捧げようと思った。」

粉川はそれ以降の年月、妻の協力を得事業の収益を注いで、体系的に日本のゲーテ文献全体の蒐集を始めた。同時に彼は知識を深めたが、その際日本の著名なゲーテ研究者木村謹治が、彼の精神的指導者となったのである。粉川は戦争中も生命の危険を冒してゲーテ蒐集を続けた。文献捜しの途上数回も空襲によって負傷したほどである。

1949年ゲーテ生誕200年記念の年には、粉川一人の財政負担による財団法人「東京ゲーテ協会」を設立する迄に至った。東京の中心部渋谷にあるこの資料館のために彼は15年後7階建てのビルディングを建設したが、これは急速に増大するコレクション（粉川はこれを無料で一般公開している）のために、間もなく手狭になってしまった。本年11月3日、日本の文化の日に粉川は新しい最終的なゲーテ記念館を開館する。東京北区の広大な地所に粉川は、今や22万の図書・雑文献及び150万以上のカードを包括するに至った彼のコレクションのために、大文豪にふさわしい館を建設した。今後も無料で公開される新ゲーテ記念館は、今まさに完成されこの目的のために特別に設計された擬古典主義的建築の中で、その広大な図書室、展示室と共に閲覧に供されるのである。しかもすでに新しいファウスト的プランが、若々しく強壯な、そしてまたやや禁欲的な印象を与える80才の粉川（日本のかつゲーテ的長寿の模範である）を揺り動かしている。長野県の風光明媚な環境の中に、彼はゲーテ愛好家のために宿泊研究設備を整えたゲーテ研究所を作ろうとしている。そのための土地の手当てはすでにしてある。

ゲーテ・アルヒーフをめぐってみると、粉川はゲーテに関し、およそ単独の闘士ではないことが分かる。図書館には毎日約30名の訪問者があるからである。無論日本のゲーテ熱狂者の誰もが、粉川ほどにその趣味に没頭する訳ではない。粉川はこれまで東西両ドイツからの招待をすべて断わってきたのだが、これは留守をすることによって彼のゲーテコレクションに空白が出来るのを避けるためであるという。一日4時間の睡眠しかとらない粉川は、個人的に講読している380紙の新聞及び国内の文芸学関連の出版物の80%に日々目を通し、ゲーテに関する記事をチェックしている。

この狂信に近いゲーテへの熱意は、粉川自身を個の文学的形姿にまで高めることになった。日本の作家阿刀田高の短篇小説「ナポレオン狂」の中で彼は熱狂的ナポレオン蒐集家という文芸的フィクションとして現われる。この蒐集家はある日、自分はナポレオンの生まれ代わりであるという妄想にとりつかれたもう一人のナポレオン狂の訪問を受ける。この訪問者は、剥製にされナポレオンコレクションに加えられたに違いないという不気味な推測でこの作品は終わっている。こうしたブラックユーモアをもつこの小説で阿刀田は直木賞を受賞した。

ちなみにすでに言及した粉川の伝記も阿刀田の筆になる。この伝記は無論粉川の中にゲーテの生まれ代わりを見ようとするところまでは行っていない。しかし一万、ゲーテに情熱を注いだ日本人による文献が圧倒的部分を占める粉川の巨人的なコレクションを見ると、ゲーテは精神的にみて本当はドイツ人ではなく日本人なのではなかったかという奇妙な疑問が浮かんでくる。

この疑問が日本人の視点からのみならずゲーテ自身の視点からも提出されることは、後に陸軍元帥となるフォン・ヘスが若いオーストリア士官であった1813年、ドレスデンにある諸王の芸術コレクションを案内するゲーテについて次のように報告していることからわかる。「我々の見学の最後は

もっぱら日本の宮殿に向けられた。ヨーロッパ以外のあらゆる芸術作品、とりわけ日本の芸術作品の趣味、形式及び絵画についてのゲーテの所見や比較は、独創性と堅実さに富んでいた。ゲーテは日本の芸術傾向を、その本来の生き方、及び歴史的歩みからひき出してくる。」

ゲーテは日本人の「本来の生き方」を知悉していたのだろうか。日本の文化を本質的に近いものと感じたのだろうか。いずれにせよ、少なくとも日本においてゲーテとのいかなる本質的親縁性が感じ取られていたかは、粉川資料館所蔵の最初のゲーテ日本語訳及び出版物からすでに読み取ることができる。

「ゲーテはドイツ人の歴史においては後続のない突発的ケースである」とニーチエが総括したちょうどその頃に、この日出ずる国においてはゲーテ受容が始まっていた。これは、「ゲーテはまだ少しも影響を及ぼしていない、彼の時代はこれから来るだろう」というニーチエの別の言葉が少なくとも日本に於いては当てはまらないことを示している。日本に於けるゲーテ時代の訪れは、明治政府が普仏戦争の結果をみて次第にドイツへの関心を強めていた前世紀の70年代であった。

泡沫会社乱立時代にゲーテを喧伝した最も傑出した日本人は著名な詩人森鷗外その人であった。鷗外は80年代にドイツで医学を学び帰国後、ゲーテの詩の天才的翻訳、多数のエッセイ及び「ファウスト」全訳によって、ゲーテブームをひき起こし、これはその後今世紀20年代30年代に於いて三種類の日本語訳大ゲーテ全集（その中には30巻以上に亘る改造社版がある）を招来する結果となった。その間に出版された無数の単行本（最高記録は40回翻訳された「グエルテル」）、モノグラフ及び計り知れぬほどのゲーテ研究文献は無論言うまでもない。

しかもその際日本のゲーテ熱は、当初から決して高踏的な文学サークルの問題あるいはドイツ文学者の特権ではなかった。

- 5 -

ゲーテはむしろ先ずプロテスタントの人々の間で英訳を通して広まり、ゲーテを原書で読み始めたのは日本の哲学者であった。20年代にすでに刊行された19巻の木村書店版ゲーテ全集は、著名な物理学者石原の翻訳による色彩論の教訓的部分及び「植物変態論」を含んでいる。30年代には形態論に関する著作及び色彩論の歴史的部分が続き、それ以後自然科学者としてのゲーテもまた日本のゲーテ研究の確固たる構成要素を成している。

ちなみに日本にはゲーテ協会が同時に二つ存在しており、それぞれ独自のゲーテ年鑑を刊行していることを述べておきたい。1932年のゲーテ没後100年記念には二種類の立派な記念論文集が出版された。

現代日本に対するゲーテの意味を、日本の著名な独文学者・翻訳家である手塚富雄氏は数年前次のように表現した。明治時代以来、つまり1868年以降日本の精神界に深い影響を与えた偉大なヨーロッパの思想家はゲーテ以外にも存在したが、ゲーテは他の思想家を三重にも凌駕していた、ゲーテは日本では「変わらぬ持続性」をもって影響を与え続け、学者のみならず「日本国民の広範な層」を引き付け、ひいては日本人に対し、個々の作品よりも「人生の叡智を通して」影響を与えたのである、と。

こうした種類の日本人のゲーテへの近しさの例は、ゲーテ愛好家、三井の「父としてのゲーテ」という表題の出版物に留まらない。門前町日光の元市長であった83才の日本人が数年前にものした、「3月22日にゲーテは83才にて死す、我は本日3月22日、83才になりぬ」という詩もまた特徴的である。

日本のゲーテ識者達は、日本的思考とゲーテ的それとの密かにして明白なる精神的「親和力」の理由を尋ねられると、様々な関連からなる広範なカタログを出してきて吃驚させるが、その共通点は「ゲーテは日本人のメンタリテイが期待するところに極めて合致している」というふうにはほぼ総括できよう。

理論を避ける即物的なゲーテの思考、世界への汎神論的敬虔さ、彼の率直さと寛大さといったキーワードが挙げられる。この関連において好んで指摘されるのは、一見不可能なことを可能にする日本特有の実用主義的融合主義である。つまり固有の自然信仰的神道と他国の宗教（仏教、儒教、キリスト教）との統合、ひいては西欧文明及び技術との統合である。

すなわち生まれながらの融合主義者としての日本人、そしてこの融合主義のスーパースターとしてのゲーテ、⁷⁾屢々非難的となる例の日本人の模倣と習得の能力の保証人及び守護聖人としてのゲーテということなのであろうか。ゲーテに造詣の深い日本人は、W. v. フンボルトに宛てたゲーテの晩年の言葉に言及し、それに賛意を表す。「最善の天才とはあらゆるものを自己の内に受容し、あらゆるものを自分のものとし、しかもその際固有の本分、つまり人が性格と呼ぶものを少しも損わぬものである。」

一万また他の公然たる種類の類似もまた指摘されている。例えばゲーテの懇懇さ、同意、畏敬、感謝に対する天賦の才能。これらの美德は儒教的影響を受けた日本人の社会感情にとっては本質的に全く同質のものと思われた。他方ではまた、日本人の人生哲学に適った、現在すなわち瞬間の永遠性に対するゲーテの評価が強調され、「特定の機会」によせるゲーテの詩の中に、俳句や短歌といった日本の叙情詩形式の特徴的傾向が認識されている。

ゲーテが石と取り組みそれを「もの言わぬ教師」と見做したことは、石庭の国においては自と理解される。神風とサムライの国においてゲーテの「ウエルテル」に特別の共感が寄せられることも同様に驚くにはあたらない。芸術史家にして哲学者である亀井勝一郎は、ゲーテのこの書簡体小説に死の美学を見出し、これを一個の純粹理念への自己献身というあの伝統的日本の見解、つまりはかない桜の花に人間の苦悩の象徴をみようとす考え方と比較して称賛したのである。

すでに言及した粉川のゲーテ指導者、木村謹治は、信心深い

仏教徒として、ファウスト的救済思想を観音すなわち恩寵と慈悲の神についての仏教の教えと難なく一致させさえした。同じよりに日本のゲーテ識者星野慎一も近年、ゲーテの思想及び感情が、禅宗並びにマハヤマ仏教の重要な認識と類似した特徴を持つことを強調した。また禊の儀式をもつ日本の神道にとっては、ファウストが悲劇第二部の冒頭、美しい土地で忘却と赦しの露の中に回復を見出すのは全く自明なことなのである。

ゲーテが日本に於いて忘れられていないことを、1983年日本のドイツ文学者木村直治は、デュッセルドルフのゲーテ美術館における講演の中で次のような明晰な言葉で保証した。「日本人がドイツのこの精神的代表者に対し、常に感謝の念を忘れぬことを皆様に確言できます。」この確言がいかほど信頼できるものであるかは、次回ドイツ文学世界会議が、ドイツ語圏の国ではなく、1990年日本において開催されるという事実からも認識されるのである。

マンフレート・オステン